

外為マンスレビューI 北米編

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2013/07/01

やや材料に一休み感も？

通貨ペア	基調		ページ数
ドル/円	➡	9月FOMCを睨んでの思惑次第	2-3
		予想レンジ: 95.00 ~ 104.00 円	
カナダ/円	➡	BOCのタカ派スタンス継続か	4-5
		予想レンジ: 92.00~97.00円	

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD/JPY

ドル/円 6月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	100.51円	100.71円	93.79円	99.28円



- ① 3日、安寄りして始まった日経平均が下げ幅を縮小したことを受けてドル/円は100.71円まで上昇するも、その後再び日経平均が大幅に下落したことを受けて失速。米5月ISM製造業景況指数が49.0と市場予想(51.0)を大きく下回ると下げ幅を拡大した。
- ② 6日、対ユーロでのドル安や、米量的緩和の早期縮小観測の後退などの思惑を絡めつつ、ロンドン・フィキシングに向けたまとまった規模のドル売りが入ると、ドル/円はストップロスを絡めながら急落した。
- ③ 7日、米5月雇用統計は失業率が7.6%、非農業部門雇用者数は17.5万人増(予想:7.5%、16.3万人増)となった。強弱入り混じる結果を受け、ドル/円は発表直後に94.98円まで下落。しかし、この結果を受けて米10年債利回りやNYダウ平均株価が上昇すると、ドル/円はストップロスを絡めながら反発した。
- ④ 11日、黒田日銀総裁が定例記者会見にて、1年超のオペについて「将来必要になった時は検討する」と述べ、すぐには必要ないことを示唆すると、一瞬円高が進行。一服後はすぐに反転したが、その後この会見の様子を受けて日経平均先物が夜間取引で下落すると、全般的に円を買い戻す動きが再開した。
- ⑤ 13日、安寄りした日経平均株価がさらに下げ幅を拡大し、前日比800円以上の下落になる中、ドル/円は円高・ドル安が進行。日本株引け後には93.79円と、4月4日以来の安値を更新した。しかしNY市場に入り、NYダウ平均が上昇すると、ドル/円はジリジリと上昇。さらに米紙WSJの米連邦準備制度理事会(FRB)ウォッチ担当記者によって、19日の米連邦公開市場委員会(FOMC)後の記者会見にてバーナンキFRB議長が「資産購入プログラムの調整は終了を意味するものでなく、短期金利を近く引き上げることを意味するものではない」との見解を示すだろうと報じられると、これを好感してNYダウ平均は一段と上昇。ドル/円はこれを受けてさらに上値を伸ばした。
- ⑥ 19日、27時に米連邦公開市場委員会(FOMC)は声明で、月額850億ドルの資産購入の継続を表明し、労働市場の状況はここ数カ月で一段の改善を示しているとの見方を示した。同時に発表された経済・金利見通しでは、国内総生産(GDP)は2013年が2.3%-2.6%(同、2.3-2.8%)、14年は3.0%-3.5%(同、2.9-3.4%)、15年は2.9%-3.6%(同、2.9%-3.7%)とし、失業率は2013年が7.2%-7.3%(同、7.3-7.5%)、14年は6.5%-6.8%(同、6.7%-7.0%)、15年は5.8%-6.2%(同、6.0%-6.5%)とした。これらを受け、直後の市場では米国債利回りが上昇してドル買いが優勢となり、ドル/円は急騰した。さらにその後、バーナンキ米連邦準備制度理事会(FRB)議長は会見にて「13年末までに資産購入ペースを緩め、14年半ばあたりに購入を終了する可能性もある」等と発言。ドル買いがさらに強まり97.02円まで一段高となった。
- ⑦ 28日、米連邦準備制度理事会(FRB)のスタイン理事が「9月の米連邦公開市場委員会(FOMC)で緩和縮小検討する可能性」と発言したことなどを受けて円安が進行した。

USD / JPY

今月のポイント

6月のドル/円相場は93.79～100.71円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.1%の下落(ドル安・円高)となった。

この月のドル/円相場は米雇用統計以降、雇用関連指標に良好な結果が目立ってきたことから徐々に18-19日に行われる米連邦公開市場委員会(FOMC)について、「量的緩和(QE)の規模縮小が決定されるのではないか」、などとの思惑が広がったが、一方で日本株が暴落後乱高下を繰り返す展開になったことでリスクオフムードが広がると、93円台まで値を下げた。しかし、そうした混乱が一服した後はFOMCに向けてドル/円は再び戻り歩調を辿った。特に、FOMC声明発表後のバーナンキFRB議長の記者会見やその後の要人発言などによって年内のQE縮小観測がより強まるとドル買い意欲が強まる様子を見せた。

7月については、月末にFOMCが予定されているが、ここでのQE縮小の可能性を見る向きは少ない。7月については、多くの市場関係者がQE縮小開始のタイミングとして見据える9月FOMCに向けて、各種材料を見ながら観測を強めたり弱めたり、という繰り返しになりそうだ。QE9月縮小観測が強まればドル買い要因に、弱まればドル売り要因となるだろう。

ただ、株式市場の動向には注意したい。6月前半の株価の乱高下については6月下旬以降に落ち着きを取り戻したように見える。しかし、再び同様の動きが出てくるようなことがあれば、リスク回避度合いが強まり、これまで買い優勢だった通貨(ドル/円の場合はドル)が売られるような流れになろう。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 95.00～104.00円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

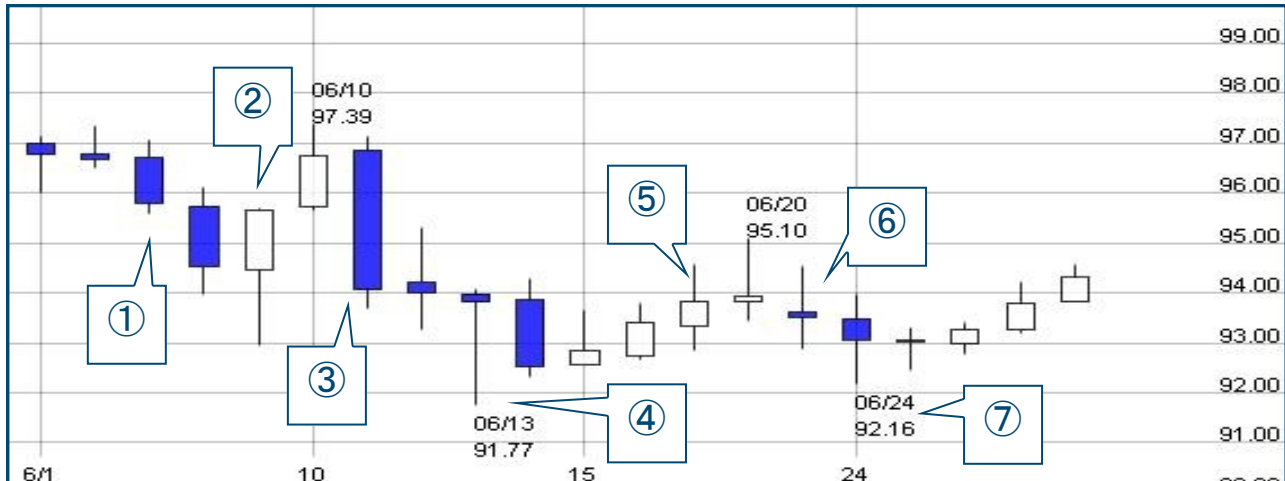
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
7/1(月)	日銀短観		6月米消費者物価指数
	6月米ISM製造業景況指数	7/17(水)	日銀金融政策決定会合議事要旨 (6月10日・11日分)
7/3(水)	6月米ADP全国雇用者数		6月米住宅着工件数
	5月米貿易収支	7/18(木)	7月米フィラデルフィア連銀景況指数
	6月米ISM非製造業景況指数	7/21(日)	本邦参議院選挙
7/5(金)	6月米雇用統計	7/23(火)	7月米リッチモンド連銀製造業指数
7/8(月)	5月日経常収支・貿易収支	7/24(水)	6月日通関ベース貿易収支
7/11(木)	5月日機械受注	7/25(木)	6月米耐久財受注
	日銀金融政策決定会合(10日～発表)	7/26(金)	6月日全国消費者物価指数
7/12(金)	7月米シシガン大消費者信頼感指数・速報値	7/30(火)	7月米消費者信頼感指数
7/15(月)	6月米小売売上高		7月米ADP全国雇用者数
	7月米ニューヨーク連銀製造業景況指数		第2四半期米GDP・速報値
7/16(火)	6月米鉱工業生産		FOMC政策金利発表

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

CAD/JPY

カナダ/円 6月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	96.98円	97.39円	91.77円	94.31円



①	5日、安倍首相が成長戦略第3弾の概要を発表するも、その内容に目新しさがなかった上、年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)の運用方針変更に関する言及などもなかったことから、円高・株安が進行。さらに、NY市場に入ると米5月ADP全国雇用者数などの弱い結果を受けてNYダウ平均が下落する中、カナダ/円は95.59円まで値を下げた。
②	7日、米5月非農業部門雇用者数が予想を上回る伸びとなった事でドル/円が上昇。さらに、同時に発表された加5月失業率が7.1%と予想(7.2%)を下回り、加5月雇用ネット変化が9.50万人増と予想(1.50万人増)を大幅に上回る良好な結果となりカナダドル買いが強まると、カナダ/円の上昇が加速した。
③	11日、日銀が金融政策の現状維持を発表すると、一部で市場安定化策として、1年に限定している資金供給オペを2年超へと延長するとの観測が出ていた反動から、直後の市場では失望感から円を買い戻す動きが強まった。さらに、米量的緩和縮小への懸念からタイやインドネシア、フィリピンなど、アジアの新興国株価が大幅に下落すると、リスク回避の円買いが加速。欧米市場でも株安の流れが続くとカナダ/円は93.68円まで下落した。
④	13日、安寄りした日経平均株価がさらに下げ幅を拡大し、前日比800円以上の大幅下落となる中、円買いが強まった。さらに、アジア新興国の株価も続落した事を受けてリスク回避の動きが加速。カナダ/円は一時91.77円の安値まで下落した。しかし、NY市場に入ると株価が堅調に推移、NYダウ平均が15000ドル台を回復して上昇すると94円台まで大きく反発した。
⑤	19日、米連邦公開市場委員会(FOMC)が景気判断を上方修正し、経済見通しを上方修正。さらに、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が、早期の量的緩和縮小・停止の可能性に言及。これを受けてドル/円が大きく上昇するとカナダ/円も94.55円までつれ高となった。ただ、同時に米ドル/カナダドルでも米ドル高(カナダドル安)が進んだため、乱高下しつつも93円台に押し戻された。
⑥	21日、一時300円超下落していた日経平均株価が300円高へ切り返すとカナダ/円は94円台を回復。しかし、加5月消費者物価指数が前月比+0.2%、加4月小売売上高が前月比+0.1%といずれも予想(+0.4%、+0.2%)を下回った事やNYダウ平均がマイナス圏に沈んだ事を受けて92.89円まで反落した。
⑦	24日、中国の金融機関の資金繰り懸念が高まる中、上海総合株価指数が2000ポイントを割り込んで下落すると、リスク回避の動きが強まり92.16円まで下落した。しかし、その後はNYダウ平均が下げ幅を縮小したのにつれて買戻しが入り93円台を回復した。

CAD/JPY

今月のポイント

6月のカナダ/円相場は91.77～97.39円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約2.6%の下落(カナダドル安・円高)となった。5月下旬に突如として値崩れを起こした日経平均株価は、不安定な値動きが6月に入っても継続。さらに、米量的緩和の縮小により、資金流出が続くとの見方から新興国の株価・債券・通貨が全面安となった事がリスク回避のカナダドル売り・円買いを促し、13日には91.77円の安値を付けた。もっとも、その後は、米連邦公開市場委員会(FOMC)が、年内の量的緩和縮小開始の可能性を明言した事や、新興国市場の混乱が続いた事などを背景に92円台から95円台を乱高下しつつも安値更新には至らず、下旬には次第に下値を切り上げた。米量的緩和の早期縮小観測の高まりとともにドル/円が反発した事や、日米欧など先進国の株式市場が落ち着きを取り戻し始めた事などが中旬以降のカナダ/円相場をサポートした格好であり、7月相場でもこうした動きが続くのが焦点となろう。中国を中心とした新興国市場の動向が波乱要因となる可能性は残るが、7月は下半期へ向けた新規投資が活発化しやすい月とされており、先進国を中心に株高基調復活の期待がかかる月となりそうだ。また、米国の量的緩和縮小が見込まれる中、米国と同じ経済圏に属し、景気サイクルも類似しやすいカナダでも、比較的早期の引き締め観測が高まる可能性があるだろう。物価の上昇率は高くないものの、住宅投資がやや過熱気味という点も米国とカナダの共通点と言えよう。カナダ銀行(BOC)のポロズ次期総裁は先月6日、議会証言に臨み「金利はある時点で上昇する」と述べており、利上げの必要性を示し続けてきたカーニー前総裁のスタンスを踏襲した格好だ。17日に発表されるカナダ中銀の声明が注目されよう。(神田)

(予想レンジ: 92.00～97.00円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
7/1(月)	日銀短観	7/15(月)	第2四半期中国GDP
	6月中国製造業PMI		6月中国鉱工業生産
	6月米ISM製造業景況指数		6月米小売売上高
7/3(水)	6月米ADP全国雇用者数	7/16(火)	6月米鉱工業生産
	6月ISM非製造業景況指数	7/17(水)	6月米住宅着工件数
7/5(金)	6月加雇用統計		加中銀政策金利発表
	6月米雇用統計	7/19(金)	6月加消費者物価指数
	6月加Ivey購買部協会景気指数	7/21(日)	本邦参議院選挙
7/8(月)	5月本邦経常収支・貿易収支	7/23(火)	5月加小売売上高
7/9(火)	6月加住宅着工件数	7/24(水)	6月本邦通関ベース貿易収支
7/10(水)	6月中国貿易収支	7/31(水)	5月加GDP
7/11(木)	日銀金融政策決定会合(10日～発表)		第2四半期米GDP・速報値
	5月加新築住宅価格指数		米FOMC政策金利発表

巻頭の特記事項を必ずお読みください。